

自業の精神を後押しする先達 書籍

堀田善衛

- 「モンテニユ 初代エッセイストの問いかけ」 荒木昭太郎 中公新書
- 「偶然性と運命」 木田元 岩波新書
- 「カメラの前のモノローグ 埴谷雄高・猪熊弦一郎・武満徹」

マリオ・A 集英社新著

- 「いきの構造」 九鬼周造 岩波文庫
- 「風姿花伝」 世阿弥 ワイド版岩波文庫
- 「ワイトゲンシュタイン 論理哲学論」 山元一郎 中公クラシックス
- 「言語を生み出す本能」 スティーン・ピンカー NHKブックス
- 「新訳 茶の本」 岡倉天心 大久保喬樹訳 角川ソフィア文庫
- 「無の探求へ中国禅へ」 柳田聖山・梅原猛 角川ソフィア文庫
- 「美学入門」 中井正一 中公文庫
- 「人生という作品」 三浦雅士 NTT出版
- 「宇宙は本当にひとつなのか」 村山斉 講談社ブルーバックス
- 「偶然とは何か 北欧神話で読む現代数学理論全6章」

イーヴァル・エクランド 創元社

佐藤初女

若松英輔

堀田善衛

「本当にわたしは堀田善衛が好きなんだ！」

二〇〇八年十一月十一、十二日。神奈川県近代文学館「スタジオブリが描く乱世堀田善衛展」。この展示会だけのために出かけた二日間。一日目は閉館までの二時間ほど。二日目は開館から昼下がりにかけて。展示が、これまで数々の展示会に出かけて、展示の中に入り込み、観たのは初めて。

両日ともに観覧者はほぼ一人。読んだ本の記憶がよみがえり、堀田善衛の歩みを辿り、この作家を知ることができたことに感謝の思い。恩師が主宰していた読書会である月にとりあげられた「若き日の詩人たちの肖像」がその始まり。以来好んで読み、全集も買ったのでした。

「日本の良識、逝く」。訃報を伝える新聞がそう書きました。宮崎駿も抛りどころにしていた堀田善衛。その一筆。

「古代ギリシャでは過去と現在が（我々の）前方にあり、従って、（我々が）みることのできるものであり、（我々が）みることのできない未来は（我々の）背後にあるものと考えられていた。これを敷衍すれば、われわれは全て背中から未来が入っていくということになる。つまり、Back to the future」

「モンテ・ニユ 初代エッセイストの問いかけ」 荒木昭太郎

モンテ・ニユへの思い入れが並々ならぬ。モンテ・ニユと一体化している。著者にとってもモンテ・ニユは自分を後押しする存在。著者にも共感しながら、モンテ・ニユの「エッセー」に、人間社会の普遍性を教わりました。

「エッセー」が書かれたのは五三〇年以上も前。でも現代を語っているのかしらと思うほど、今に通じるものがある。そしてモンテ・ニユの思考様式、行動様式に共鳴すること多く、まるで知り合いの語りを読んでいるような親しみ。

「わたしの思考は、もしすわらせておくと眠ってしまふ。わたし精神は、もし足がそれを揺り動かさないと進んでいかない。本なしで勉強する人びとは、皆そうだったものだ」

そう、考えをめぐらせたい時は歩く。木や花や水が視野に入る、行きなれた場所を。初めてなら風景に意識がうばわれる。

「わたしが自分の運命に対して抱くもつとも重要な感謝のひとつは、わたしのからだの状態の進行が、おのおのの部分がおのおのの時期にうまく合致して運ばれたということだ。わたしはその新芽と花と実とを見た。そして今その枯れたさまを見ている。幸いなことだ。なぜならばそれは自然のことだからだ」

「いきの構造」 九鬼周造

中の趣味を聞かれると返答に困ります。求職
書履歴書には苦肉の策に「京都散策」と
が唯一の趣味といえば趣味。相手によって
は笑いながら、「生きていること自体が趣
味のようなものですか。」

「趣味は読書」というほど、本を読ん
ないし、活字が好きというほど、本を
せん。ただただ精神の糧になりそう
求めた結果、数少ない本の読書歴とい
こと。自分から見つけることもあ
に教える人も、場合によって、精神面
える人の選択にならなくて、共感し合
がいて、それを哲学する人がいる。そ
か、目で、またみえないものに光があ
社会の知、また一つ広がる。読んだ
よって、は、自負を得る。

この本を読んで思い出したこと。年配の
知人に誘われ参加したハイキング。グ
プのメンバ―は全員が長男の性。チヤ
ヤされる中、普通にかれたのは、そ
い人。ごく普通に接し、さりげなく
かい、丁寧語で話しかける。そこ
の色気。媚びない。「いき」の一つの要素。

「風姿花伝」 世阿弥

人に教えてもらった本ですが、本当によ
くぞ二年の三月に二十五日。読みながら、
〇〇年の三月に二十五日。読みながら、
自分にとつて「バイブル」になる本だと
思ったもので、人の役務にあたる仕事す
べてによい教えとなるはず。もちろん、生
き方のお手本という面でも。

この本を読んで四年後の初夏、創業塾で
山形市内、翌日曜日に鶴岡の二ヶ所、土
曜日の塾、終了後に鶴岡へ移動。その初
め、の日の鶴岡に近づいたところ、車
運転する塾主催者の方から教えてもら
「黒川能」演じてきた伝統行事。回り
つくり、演じてきた伝統行事。

ひょっとして佐渡に流された世阿弥が伝
えたものかと身をおこして尋ねてみると、
え、は、ない、かしら、という、俄然興味
がわき、実際、二〇〇七年二月に「お
め、で、旅、した、ので、ラン、アルケ
「ター」で、ラン、ス、と、ラン、アルケ
ノ、で、ラン、ス、と、ラン、アルケ
訪ね、館内を独り占めして。「土門拳記念館」も

「黒川能」のことを聞いたおかげ、今も縁
は、つな、が、っ、て、い、ま、す。

「ワイトゲンシュタイン

論理哲学論」

われながら、いとおしくとふり返るのが一九九五年からの三年。学びに目覚めて、いろいろなことによく学び、吸収した自分の姿が浮かびます。

事務所を開設したことで人の関心をひくことになり、人々をとおして自分を映すことになった。他の多くの人と自分の違いを思い知ることになった。じゃ、どういう風にしているのか、自分が出来上がったのか。何が違うのか、そういうことを解こうと頼るのは知。当時の手帳は今も時々見返すほど、知の記録になっていきます。

手帳に書き残しているのは、本の抜粋、言葉の意味など。分野はいろいろですが、共通しているのは、根本的なこと、原則的なこと。そういう志向からか、この論の進め方、表し方がしっくりきたのでした。

1 世界とは、その場に起こることのすべてである

5.641 ここに哲学において自我は非心学的に問題になりうるということの意義が厳存する

内容をすべて理解できませんが、根本的なことを気づかせてくれる一冊。

「言語を生み出す本能」

ステイブン・ピンカー

天才的な人というのは分野の枠を越えているもの。このステイブン・ピンカーや後のイーヴァル・エクランドはまさにそういう人という感じがします。

一九九五年、自分を読み解くのに、心理学はあまりピンとこなかった。ある日、図書館で見つけた「心とコンピュータ」という本。数理科学振興会主催の夏季セミナーの様子をもとめたもので出版はジャストシステム。

多彩な講師陣の一人、「松本元」にひかれ、岩波科学ライブラリーの「愛は脳を活性化する」を読んだのが誘い水。以来、脳科学や認知科学の本、ひいては記号論の本を読むようになったのでした。

そういう面をよく知っている人が教えてくれた本。今回とり上げている本たちは、たぶん、ずっと捨てずに持ち続けます。いつでも取り出せるように、棚の見えるところに立てています。

この本もすぐにとれます。最終ページを開いてみます。うん？読み終えた日ではなく、買った日と場所を書いている。二〇〇二年十月二日京都ジュンク堂。ああ、あの時だ。と記憶がよみがえったメモ。

「新訳 茶の本」岡倉天心

記録してないけど記憶している一つに、大それた想念があります。夜の帰り道、自宅に着く手前の車道。信号待ちをしていて、青に変わり一步踏み出した瞬間、

神は自分の中にある！

何を考えていたのかは思い出せません。あつたはずで、駅からずつと考えながら歩いていた。信号待ちで立ちどまり、頭の中も少し落ち着いて、まとまりのない考えをまとめようとしていた。信号が変わり、ふたたび歩き出したとき、ピタッとスイッチが入った。一九九四年頃のことです。その後事務所をもち、様々な人と行き交ううちに意識する、自分の内に根をはる空気感。それが道教的な自然観に通じるようだと、思い至ったのが二〇〇三年春。先の大それた想念からすると十年後のこと。禅もまたしかりで、茶道は禅の精神を形にしたようなものだから、有名なこの一冊を手がのびたのだと思います。自分ではやろうと思いませんが、茶道の真髄に共感。自分なりに、次のように解釈。

「日常のちよっとした時間」を「われにかえり」、宇宙を感じる「時間」を持つことか

「無の探求へ中国禅」

柳田聖山・梅原猛

この本を買ったのは二〇〇八年。しばらく熱心に読み書きをしたものです。ただし、中断したままですが。

禅の起源は、古代インドのヨーガ

禅は、実践的な関心から出発

ゆえに思想の形成に体系的な立場をもたない
 仏教の体系の全てを禅の思想とみてもかまわないが、反面、イコールとはならない

さらに、一般に禅の思想とみられているものは、ほとんどが「老荘」、あるいは「儒教」の思想

ノートには「高僧伝」のことや語録をいろいろ書き写しているのですが、内容は全く記憶なし。ただ、智恵とは心の安らぎをもたらし、たまたまの、と自分なりの解釈できたことが収穫。ノートの最初は、本冒頭「はしがき」の「梅原猛」の弁。

「私は、私ながらに、禅の中にすばらしい精神の光を見いだした。その光の中心には「自由」ということばがあった。（略）そこには、否定すべからざる、人間の尊厳の自覚の主張がある。各人が皆、自由な仏性をもって覚えているのである。その仏性を、個性的な仕方である。その仏性を、個性のな仕方で自覚し、その仏性をかがやかせというのである」

「美学入門」 中井正一

今さらながらに、貴重な本たちを教えてもらったと感謝しています。人との出会いは、異なる知との出会い。人が人の可能性を拓くという、一つの典型。自分にはない考え方を知り、親しみのなかつた本に接点をもち、そこから自分の知が拓かれる。あの方、この方と、顔が浮かびます。

この本を買ったのは二〇一〇年七月十二日。小さな文庫本が、大理石の小箱のように見え、読み終えると。

「大体人々は価値あるものとして、真実であること、善良であること、美しくきれいだ。この三つを好み、尊敬し、愛するのではないだろうか。その真実について学ぶのが、哲学、論理学であり、善良であることについて学ぶのが、倫理学であり、芸術とは何であるかを考えたが、ねてゆくことが美学なのである」

「自然に触れることで、自分の本当のあるべき、守るべき姿にぶつかり、本当の自由な自分、いとおしむべき、健康な、大切にすべき自分、気がつくことは、大変なことである。死んでも守らなければならぬ自分を、発見する」ともあるのである」

本の解説者は最後に、「中井にとつて、本当の自分に出会うことが、芸術を作る営みであり、あるいは自分らしい生き様を示すことでもあるのです」。同感。

「人生という作品」 三浦雅士

新聞の書評に載ったタイトルをみて、興味をもった本です。ただ、読んだのは冒頭の序章のあたる部分だけ。そこに全てのメッセージが凝縮されていて、以降の六章は、その解説という感じがしたのです。序章はページ番号三から二十六の分量。その最後の部分に、今さらながらに目が開く感覚をおぼえました。

「未来とは、過去の空間のことなのだ。あるいは、現在を蝶番にして、過去という空間を反転させると、未来という空間になると言ってもいい。少なくとも人間にとっては、未来とはそういうものだ。」

むろん、過去はすでに決定されているし、未来は、何も決定されていないと、言うだろう。だが、そうではない。過去は少しも決定されていないし、逆に未来はすでに決定されていると、言ってもいいのだ。人間の自由はむしろ過去へ向かって開かれていく。人はただ、歴史を書き変えるように未来を書き変えるのである」

経験的にもわかったことは、過去の名残のものを処分する気になつたら、それはまた新しい未来が開いた証だということ。過去の内容と意味合いがこれから変わるといふこと。処分するといつても、過去がなくなるわけでもないし、それらを包含して、新しい次元に入るといふことです。

